

槐 かい

岡井省二創刊

平成30年5月号

平成三十年五月一日発行 第二十八巻第五号 通巻第三三三号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



レントゲン

高橋将夫

春光を三つ折りにして段畑
やさしげに降つて冷たき春の雨
佐保姫がビーナスとなる日和かな
楊貴妃に呼ばれれば蛇穴を出づ

佐保姫が羽織る緑の訪問着

鬼たちの酒の肴の田螺かな

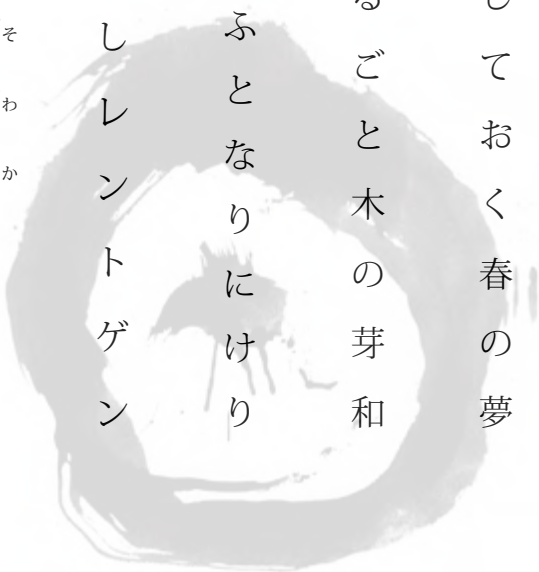
パソコンに保存しておく春の夢

人生を噛みしめるごと木の芽和

陽炎に入りかげろふとなりにけり

春愁の陰が映りしレントゲン

俺
阿
毘
羅
吽
欠
蘇
婆
詞
山
笑
ふ



槐安集

水野恒彦

鯨鳴く海より重き月上る
引鶴や豊旗雲に入日見し
天と地とうごくことなし寒卵
てのひらに白日燃ゆる利休の忌
神々の寢息にシリウス生まれしと

加藤みき

春浅しキーンと頬に風のあり
お線香の烟ますぐに春や春
スケーターのカマンベルトのとりどりに
奉書紙今立はいま雪の中
との曇り只今甲羸の口開けに

中島陽華

春帆樓ほがらほがらと初明り
臘八の山や這子の口づげに
北風とアンパンマンとタケちゃん
船上の魚のたたきや春隣
ジロー歌ふ交野の里の麦鶉

竹内悦子

袋屋の軒は天国寒雀
立春の寝釈迦の雲となりみたり
万愚節曲つてゐたる銀の匙
点滴の落ちるリズムや水温む
恋猫の出払つてをる佛間かな



雨村敏子

うすらひの下の水音や齒朶のみち
蟻の道追うてぶつかる大空に
一団の列確かなり鳥帰る
南南東亀鳴くこゑもうろくづも
白紙にあられを包む雛の夜

本多俊子

春落葉氏神さまも踏みたまふ
白梅の匂ひ余生のひきしまる
鶴唳かくれいの重なり合うて遠ざかる
まぶしさに海が海呼ぶ春の風
ゆく雲に心に乗せむ春央ななば

近藤喜子

魚は氷に上り山河の光り出す
早春や流れてゆきし日の欠片
春雪や熱さ感じる地の息吹
下萌や世の隅のやさしき日向
愁ひまだ眉間に少し涅槃像

瀬川公馨

凍皆既月食て空に赤銅あかがね色の玉変容す
温石を懐にして雪女郎
物原や凍花園となりぬべし
小気味よく氷上わたる鳥かな
銀鼠の空気愉しも二月尽

久保東海司

熊川暁子

注文に応じて茹る蟹の町
数の子や艶の失せたる夫婦箸
抛り込むものに飛びつきどんと火
風花の舞ひ包みたる柩出す
春雪と言へずひねもす降りつづく

日のにほふ枯山で見る枯野かな
ほむら立ち軽くなりたるたきびの火
淋しさが寒さひき寄す暖炉かな
霜柱をとこの虚を踏んでゆく
おぼろ月自分のみない鏡見し

柳川 晋

寺田すず江

肩で着る自由つていふ春コート
青き踏む千里の道を三步ほど
山笑ふ前に笑つてみせてやる
ロボットに真似の出来ない豆の鬼
鉄と血と王と夕日と夕の百舌

あかつきに春の鼓動を覚えけり
ひと日毎ごといのち犇めく冬木の芽
波のおと子守唄なり干鱗
流れゆく雲に憧る月日貝
細胞の弾み出したり風光る

岩下芳子

歯刷子とカード一枚春の駅
兜町からウオール街へ春疾風
春耕の土やはらかし畝太し
白雲を食べてしまひし春の空
秘密基地しかと伝へて卒業す

岩月優美子

雪解けて聞ゆる青き地の鼓動
早春の息吹ありける樹の膚へ
晩節の狭間で春を探し出す
AIの世は息苦し青き踏む
岩を打つ波音高く踏絵かな

近藤紀子

白頭の鷺に乾杯延命酒
アニマルズの歌しまく雪溶かす
揚げ菓子の揚げたてを待つ白き息
ジャズ爆発ニューオーリンズに雪しまく
如月のパキツとしたる朝が好き

竹中一花

絶食の腸(わた)に届くや春の水
血と骨と臓と腑春を食うてをる
胸の上の髑髏笑ふや春の昼
ばあ達の桃の節句や白狐の間
ひとこ^棹系を若狭の海に鳥帰る

前田美恵子

一塊の命の濁り春の川
円陣を組むには足りず残り鴨
吾が心の映る薄氷壊れけり
淡き影曳きて田を打つ漢かな
囀のやがて地に消え空に消え

中田禎子

天網を抜け行くコイン地虫出づ
言の葉のミラーボールや薄氷
マニキュアの指ざつくりと春の土
平成の三丁目なり春の雪
第三の眼は海馬涅槃西風



槐市集

阪倉孝子

初音きくこけしのうす目開きける
白梅へとけてゆきける少女かな
笹鳴きや福耳へ紅とどめける
浮雲をふんはり降りて春來たる
写経終へ水仙深く匂ひ立つ

柴田靖子

連れ舞ひてクルスの光春動く
春日さす生きしもの皆おどりだす
野焼きして胸底の火やきつくさむ
かけぬける足音かろし春立や
闇いでてこの輝きを雛飾る

庄司久美子

木々すり抜けて粉雪の時計台
一匹の鯉の大口春兆す
鳳凰の池に鎮もれ牡丹雪
藪椿小角の走る下駄の音
ひらひらと楽譜読む指シクラメン

杉原ツタ子

両岸の汀冬枯れ雲ふはり
風の香に支度出来たと冬木の芽
火灯窓春の日ゆるり吸ひにけり
齡来てもろもろのこと二月尽
通ひ道川面騒めき春隣



高野昌代

風吹けば笑顔極める花すみれ
石清水宮汲めば弾ける春の水
流れゆく小川をはやめ藪椿
庭梅や匂ひ纏ふて夫見舞ふ
退院と声色たかき雪解富士

竹村 淳

大寒や凍てず輝く北極星
大和路や焼嗅しさす門構へ
比叡 風青鷺凍る鴨河原
紙衣着の籠りの僧の二月堂
冬ざれの野面をあさる雀すずめ

田中 信行

パリ想ふ東京駅の雪景色
春までにまだ一仕事離陸待つ
寒夕焼終着駅を告げにけり
剪定の時期を探りて爪を切る
兜太逝き河津桜の咲きにけり

田中美恵子

水神の伏見にありて露の臺
奥州に辿り着きたる桜かな
茶畑や聞こえて来たる笙の笛
烏啼く夕日の中に種を蒔く
春の月樹々のはざまにある余白

時 澤 藍

除雪車のかなはぬ雪の降り続く
雪だるま今や人氣のキャラクター
気がかりは根雪の下の作り物
春浅し漢方薬の湯気匂ふ
風花や気儘な旅は楽しいか

中 貞 子

臘梅のかすかに揺れし朝日影
駱駝の眼砂丘の向かふ春の海
春泥や鳥の足跡踏みてゆく
駱駝の瘤砂丘に春の雪いちめん
花ぐもり荒湯の湯気か湯の神か

槐集

高橋将夫選

雛菊やダイヤ婚から神の域
大阪 江島 照美

萌え出づる心の生むや蜃気楼
野火走る知らぬままなる死のありし

針持てぬ母となりけり針供養
風花やはらはらと舞ふ恋の文字

キヤラメルの箱に天使や春隣
立春や刻の結び目ほどく音

紙風船明日嫁入りの姉の息
春の海まるごと上げる地曳網

深海の色の喪服を着ておぼろ
落葉して夢のかげらをまとふ木木

青き日日温めてゐる枯芭蕉
冬帽子目深に今日を背負ひけり

水仙や銕入れればキュツと鳴く
露の臺そのさみどりを夢と言ふ

竹原 久保 夢女

有松 洋子

三千大千世界雪虫紡ぐ生死かな
大阪 平野 多聞
涅槃西風種一粒を吹き流す

日向ぼこ猫と分ちて浄土の座
雪搔いて建て付け悪き手足かな

雪の果後生大事と水光る
紛争の種となる神冬の雷

風神の足跡残る薄氷
物言はぬ兵士のごとく樹氷林

妖精の羽根見え隠れスケーター
北窓を開けふれよ新しき風

ゴム風船心許して膨らめり
守口 三木 亨
古びたれど自慢のスーツ獵名残

麦踏みや何の種まくミレーの絵
枝に受く神の呟き未開紅

野を焼きて一皮剥ける男かな

藤田美耶子

梶集の選は言うまでもなく作品本位。しかし、上位にあつては特選、準特選級の句がずらりと並ぶので、掲載の順序に苦慮することがしばしばある。今回はそれを特に強く感じた。巻頭について言えば5、6名は誰が取つても不思議でない作品内容であつた。異例ではあるが、選者冥利につきる話でもあるので冒頭に記しておく。

雛菊やダイヤ婚から神の域 江島 照美
死別や熟年離婚などがあるから、ダイヤ婚を迎えられることはそれなりにめでたい。しかし、その時お互いにどんな状態であるかが問題。作者は「神の域」という。「雛菊」をヒントに想像してみるのも一興。

〈野火走る知らぬままなる死のありし〉の句は野焼きで死んだ虫たちや、人の孤独死を捉えている。そして、〈針持てぬ母となりけり針供養〉も生死を見詰めた一句。

〈萌え出づる心の生むや蜃気楼〉と〈風花やはらはらと舞ふ恋の文字〉の句、作者の心はまだ青春にある。

キャラメル の箱に 天使や春隣 有松 洋子
句会で皆が森永キャラメルを連想した。懐かしい。
〈春の海まるごと上げる地曳綱〉は「海をまるごと上げる」という地曳綱の描写が素晴らしい。

〈立春や刻の結び目ほどく音〉は「刻の結び目」、〈深海の色
の喪服を着ておぼろ〉は「深海の色」の着眼がいい。
〈紙風船明日嫁入りの姉の息〉は壺を心得た一句。

落葉して夢のかげらをままとふ木木 久保 夢女
落葉したら、今度は夢のかげらをまとう。岡井省二先生の句に「もの芽や夢の一字はくらがり」という句があるが、夢女さんにはいつまでも夢を捨てないでほしいと思う。

〈路の臺そのさみどりを夢と言ふ〉も夢の句。これからは夢女さんを「夢の夢女」とさんと呼びたい。
〈青き日日温めてゐる枯芭蕉〉の「青き日日を温める」や〈冬帽子目深に今日を背負ひけり〉の「今日を背負う」や〈水仙や缺入れればキユツと鳴く〉の「キユツと鳴く」、どれもみな作者ならではの感性。

雪掻いて建て付け悪き手足かな 平野 多聞
雪が屋根に積もると、重みで家の建て付けが悪くなる。それを身体表現に用いたところが俳諧。

一転して、〈三千大世界雪虫紡ぐ生死かな〉の句は小さな綿虫の命を三千大世界という大きな視点から捉えた。
〈涅槃西風種一粒を吹き流す〉と〈日向ぼこ猫と分ちて浄土の座〉と〈雪の果後生大事と水光る〉の句には「仏の多聞」の面目躍如たるものがある。

〈以下略〉